



歴史の創造



行為は歴史を開く

小林 道憲

歴史の創造—行為は歴史を開く

永林 道憲

(日本の哲学者)

偶然に翻弄され、破壊と創造を繰り返しながら、歴史は変動してきた。各瞬間が歴史の分岐点であり、どのような方向にでも歴史は変わっていくものである。とすると、その分岐点における行為の仕方によって、歴史は様々に分かれていくことになる。行為こそ歴史を開く。創造的個人の革命的行為や、発明発見など、自由で創造的な行為を起点にして、歴史は突如として激変していく。この論文は、歴史を切り開く行為に注目して書かれた〈歴史とは何か〉の考察である。

1 歴史を切り開く行為

行為の投入

一八六三年五月、外国船を砲撃して危機に陥った長州藩は、

防衛強化のため、高杉晋作に、出身身分を問わない軍・奇兵隊を結成させました。しかし、翌年八月、長州藩は、第一次長州征伐で十五万の幕府軍と対峙、そのため、長州藩では幕府への恭順派が実権を握り奇兵隊も解散させられました。幕府打倒を主張していた晋作は身の危険を感じ、博多へ逃げましたが、密かに長州に舞い戻り、たった一人で決起、解散させられていた奇兵隊や諸隊に決起を促しました。しかし、一八六四年十二月十五日夜、晋作の呼びかけに呼応して功山寺に集まった有志は、たったの八十人でした。ところが、これがやがて三千人に膨れ上がり、高杉軍は下関の拠点を奪い、萩へ進軍、恭順派を追放して、長州藩を倒幕で統一しました。かくて、一八六六年の第二次長州征伐では、長州藩は海からも攻められましたが、晋作の奇策によって、幕軍を敗北に至らせることができました。その戦いの果て、晋作は、一八六七年四月十四日、二十九歳で病没しました。しかし、この幕軍の敗北によって倒幕の動きが急激に拡大、大政奉還から王政復古、明治新政府の成立へとわが国は大きく変貌し、新しい時代に突入していきます。その意味で、高杉晋作の功山寺

挙兵は、わが国の歴史でも画期的な回天の行為だったと言えます。

歴史は動くのではなく、動かすものです。歴史は、ひとりで変わっていくものではなく、変えていくものであり、そうである以上、変える者がいます。人は常に何事かを言い、何事かを為し、働いています。その行為によって歴史は動きます。高杉晋作の行動によって幕府の威信が一挙に低下したように、投げ出された行為の一撃によって、歴史空間が一変することがあります。わたしたちは、歴史によって形成されるとともに、歴史を形成します。わたしたちの行為は過去の歴史によって規定されてはいますが、しかし、それを打ち破り、新しい歴史をつくっていくのもわたしたちの行為なのです。

わたしたちは、常時ある状況の中に投げ出されているとともに、その状況の中に一つの行為を投げ出してもいます。このとき、どんなに些細な行為であっても、行為の決断と実行の重みは無視できません。行為の決断は、ある行為をするかしないかの選択であり、二者択一です。二者択一の行為によ

って、状況は変えられます。一方を選ぶ行為が歴史を限定し、歴史の形成を起こします。どちらの方向に進んでいけばよいのか迷っているとき、どちらか一方の行為を選択することによって、歴史は一変します。

行為するということは選択するということです。この無数の行為の選択が無数の対称性の破れを構成し、歴史の過程や結果を非決定的なものにします。行為の選択と決断こそ、歴史の新しさを創造します。特に、人一人の人生を左右するような選択や一国の命運を決するような選択の重みは大きいと言わねばなりません。現在における行為の決断と実行の中に、過去と現在のあらゆる出来事が集約し、そこからシナリオのない歴史のドラマがつくられます。どのようなドラマが作りだされるかは、その時その場での行為の選択と相互行為に依存しますから、前もって予測することも、規定することも、法則化することもできません。

その意味では、状況を切り開き、状況を変革していく行為こそ、歴史を動かす行為として評価しなければなりません。行為によって状況は打開され、時代は開拓されていくのです

から、時代の流れに抗して、その流れを転換していく行為を、歴史を動かす積極面に位置づけねばなりません。時代の変革は、このような例外的個人の先駆的な行動から起きてくるのです。今までの歴史上で活躍した革命家たちも、時代に反抗し、時代の逆風に抵抗しながら、みずからの行為によって道を開き、状況を積極的につくってきました。

行為は歴史を開きます。歴史は、ただ単に眺められるのではなく、生きられねばなりません。生きるということは、ある一定の状況の中に行為を投げ入れ、状況をつくっていくということです。行為し活動することが、生きるということです。行為して活動する人間によって、歴史はつくられていくのです。

わたしたちは、歴史の単なる傍観者ではありません。わたしたちは、歴史の中で行為しています。歴史の認識も、この行為と深く結びついていますから、学問も実践的性格を帯びてきます。

例えば、フランスのマルク・ブロックはすぐれたヨーロッパ中世史の歴史家でしたが、『歴史の弁明』を書き上げてい

る途中でナチス・ドイツ軍の侵入に遭遇、それに対するレジスタンス運動に急遽参加し、命を失いました。確かに、それは悲劇的な結末ではありましたが、しかし、その歴史学上の業績にもまさる歴史的行為が、レジスタンス運動への参加だったのです。ブロックの『歴史の弁明』が後半部分でプツリと切れているのは、そのことを如実に語っています。だから、『歴史の弁明』は未完の著作に終わっていますが、しかし、そこで、彼の歴史学は完成しているのだと言わねばなりません。真に歴史を生きる歴史家はそうでなければなりません。行為や実践は理論に優ります。身をもってする実践こそ、歴史を動かしていきます。

二十世紀以来、わたしたちは、世界経済の緊密化とともに、その急激な崩壊を何度も経験してきましたが、そこからの回復も、何もしないで回復していくというものではありませんでした。政治が経済に積極的に介入することによって回復してきたのです。一九三〇年代の世界恐慌でも、アメリカのニューディール政策などに代表されるように、積極的な公共投資が有効需要を起こし、それが失業者や過剰物資をなくして

いきました。果敢に行動してこそ、経済も回復します。歴史の変化は、ただ無為のまま自然と起きてくるものではなく、その中で、わたしたちが行為することによって起きてくるのです。

人間の営む歴史は、人間の行為的連関によって成り立っています。そして、歴史の変動は、この行為的連関の中に一つの行為が投げ込まれることによって生じます。行為的連関の場に投げ込まれた行為は、その行為的連関を組み替え、新しい秩序を生み出していきます。人は、行為することによって関係を形成し、行為的連関を変えていきます。関係を動かし、連関性を変え、状況を切り開いていく積極的行為が必要なのです。

未来への行為と過去

確かに、わたしたちは過去の歴史によってつくられています。わたしたちは過去からの伝統や習慣の中に産み落とされ、そこで成長します。現在は過去の累積の上に成り立っており、過去は現在の中に生きています。現在にまで食い込んでいる

過去は取り消すことのできない事実であり、わたしたちにとって桎梏とも化し、呵責ない運命ともなります。

しかし、わたしたちは、この運命を積極的な行為によって打開してもいきます。わたしたちの行為は常に歴史によって制約されていますが、しかし、わたしたちは、その行為によって、その制約を乗り越えてもいきます。行為こそ運動と発展を起こし、未来とかかわります。わたしたちは、大海に漕ぎだす船乗りのように、未来に向かって行為を投げ出すことによって、過去の運命を打ち破り、新たな創造に向かって進むのです。

とはいえ、わたしたち自身が参加している歴史がどのように動いていくかは、わたしたちには分かりません。わたしたちの身に何が降りかかるかも、見通すことができません。未来を切り開こうとするとき、わたしたちはいつも未解決の矛盾にぶつかります。未来には絶えず新しい課題が発生し、その解決に向かってわたしたちは行動しますが、いつもその解決は不完全で、また新たな課題が生じます。

このような苦難に面したとき、わたしたちは再び過去を振

り返ります。人間は、前に進むためにも、後ろを振り返らねばなりません。未来に向かって歴史を形作ろうとするときにこそ、真の過去が見えてきます。わたしたちは、歴史をつくりながら、歴史を体得します。未来を開拓するためにも、過去は必要なのです。このとき、過去は模範となり、拠り所とみなされます。わたしたちは、過去に学ぶことによってのみ、前に進むことができるのです。そればかりか、過去もまた、この未来への新しい行為によって更新され、その知識もより深められ、生きたものとなります。

例えば、国家の歴大な財政難を解決しなければならないというような課題に面したとき、先人はどのようにして財政改革を実行してきたかが急に見えてきます。現在における実践的な関心から、歴史に対する問いかけも立ち現われてくるのです。実際、将来のあるべき姿を熟考している歴史家こそ、過去の歴史の中から深い意味を取り出し、それを現在に蘇らせませす。それに対して、細分化し専門化した歴史学は、なるほど過去の知識をより豊富にはしますが、現在を生き未来を切り開くには、どれほどの貢献もしませせん。

現在は、過去と未来の単なる接点ではなく、過去から未来への転回点です。わたしたちが立っている現在という時点は、そこにすべての過去が宿っていると同時に、刻一刻と未来を作り出す支点です。そして、この現在という支点に行為があります。現在における行為の中にこそ、過去と未来は現前しています。過去・現在・未来へと連続する単なる時間がある中で、私は行為しているわけではありません。私の行為の瞬間瞬間の中から、過去、現在、未来の歴史が紡ぎ出されてくるのです。どんな行為でも、過去・現在・未来という歴史的時間を瞬間ごとに組み替えています。歴史は、現在の瞬間瞬間のところで生まれ出ています。そこには、歴史が飛躍する非連続点があります。現在の行為の瞬間、創造の瞬間において、わたしたちは過去を乗り越え、未来を開いていくのです。

例えば、六四五年六月十二日、中大兄皇子と中臣鎌足が、朝鮮三国の入貢の儀にかこつけて、蘇我入鹿をおびき寄せ、入鹿を斬ったその瞬間、唐の律令国家に倣った中央集権体制へと変貌していくその後のわが国の歴史の流れが開かれて

いきました。そこには、歴史の非連続面と切断面があります。

わたしたちは、みずからの行為を通して歴史を形成していきます。歴史の生成は、現在においてわたしたちが行為するということと切り離すことができません。過去の全歴史が現在の行為の中に集約して流入しているとともに、そこから未来が開かれていきます。行為から出来事は生じ、歴史は生じます。意欲と情熱にかられた行動、苦悩し労苦する行為を通して、過去の必然は超克され、未来の自由は開かれます。わたしたちは、歴史によってつくられるとともに、歴史をつくります。人間は、歴史をつくる歴史的存在なのです。

ニーチェも、『生に対する歴史の利害について』の中で、活動し、努力し、苦悩し、解放する生き方を尊び、歴史を切り開く行為の必要を強調しました。過去の枯渇し因習化した悪弊を断ち切り、苦悩しながらも解放を目指す創造的人間にこそ、歴史はあるのであって、単に過去を鑑賞する者のために、歴史はあるものではありません。束縛を断ち切り、未来に向かって努力し活動し、勇敢に自己自身の道を進む者こそ、自由で創造的な生へと歴史を切り開きます。これを、ニーチ

ェは〈批判的歴史〉と言いました。

しかし、それでもなお、未来に向かって決意する創造的主体は、過去の偉大な生き方によって鼓舞される必要があります。創造的主体は、歴史の中から偉大な行為、偉大な人間の理想を読み取り、それと共感しながら道を開いていきます。このような歴史のあり方を、ニーチェは〈記念碑的歴史〉と言いました。

また、わたしたちは、過去を保存し尊敬し、これを模範とし教師とすることを、歴史に見出しますが、それも、どこまでも、新たな未来へと努力し精進するためのものでなければなりません。このような歴史のあり方を、ニーチェは〈尚古的歴史〉と言いました。

もしもそうではなく、飢えてもいないのに過剰な知識を吸収し、単に過去の絆に固着しているだけなら、それは、むしろ生を圧殺するものだと言わねばなりません。過去の無数の顕微鏡的事実に向かってただ好奇心を働かせるだけで、現在ただいまを生きることを忘れていた専門的歴史学は、むしろ生を阻害します。歴史が新たな未来へと踏み出すためにある

のなら、ここでは、逆に、過去の〈忘却〉が必要です。創造的営為に向かうときにのみ、真に生きた歴史意識は生じます。歴史はどこまでも生に奉仕するものでなければならない、歴史認識と実践は未来から生起するものだと、ニーチェは言うのです。

行為による認識

未来に向けて行動を投げ出すとき、ぶつかった苦難が過去の歴史に新しい光を投げかけます。過去の像はわたしたちの行為の投影であり、行為の変化に応じて歴史像も変化します。歴史認識の背景には、未来への予期や期待、要求や意図、動機や感情などがあります。現場の体験が認識の源泉にはあります。現在と未来から、過去の歴史はつくられます。したがって、未来に向かってより深く掘削していけばいくほど、過去の像は新しい様相をもって現われてきます。しかも、新しく得られた過去への認識がまた将来への決断を促し、未来に対する実践知を提供します。こうして、わたしたちは、新しい段階に飛躍していきます。

例えば、現在、ヨーロッパは経済統合から政治統合に向けて努力していますが、その統合をどのようにして成り立たせるか、その理想をどこに置くか、EUの条件や由来の手掛かりを得ようとする課題に面したとき、ヨーロッパ人はヨーロッパ中世を思い出し、その歴史に目を向け、それを蘇らせます。ヨーロッパ中世においては、まだ国民国家が成立していなかったために、かえって、ヨーロッパには国境や民族の差を越えた一体性の意識が醸し出されていました。その一体性をつくっていたのは、ローマ・カトリックとその教会組織でした。ヨーロッパが多くの領邦国家に分かれていながら、同時にローマ・カトリックによって精神的に統合されていた中世という時代が、EUの問題に直面したとき、急に思い出されてくるのです。

過去の記憶は単なる記録や保存ではありません。わたしたちは、未来に対して行為を投げ出すことによって、過去の記録からそれに相応しい記憶を呼び戻し、まったくどうなるかわからない未来に対処していきます。だから、行為の投げ出しのしかたによって、過去の記憶は絶えず新しく蘇ってきます。

す。

十五、十六世紀のヨーロッパのルネサンスにおいても、中世の束縛から離れ、新しい生き方を模索しようとしていたヨーロッパ人たちは、古代のギリシア・ローマの古典に帰り、それを再生して、新しい生き方の指針としました。歴史は幾度となくみずからの過去に帰り、帰ることによって同時に再生してきます。わが国の明治維新が王政復古による急激な革新だったことから分かるように、復古が変革のバネになります。行為の必要性が過去の歴史を復興します。だから、また、復興された過去は、純粹にあった通りの過去ではありません。過去も、更新されるとき、理想化されるのです。歴史は、やむことのない復帰と再生によって螺旋的に歴史的生命を持続し、これを絶えず創造していきます。

記憶は、行為という文脈の中で理解しなければなりません。未来に向かってどのように行為していくかということと記憶は直結しています。ものを覚えたり思い出したりすることが、生きて働くということと深く関係しているように、過去の歴史を想起し再生するにも、未来への行為の投入がなけれ

ばなりません。逆に言えば、未来に向けて必要なものだけが想起され、今、生きていく上にとって不必要なものは忘却されます。記憶とともに忘却ということがなければ、人は生きていくことができないのです。

ハイデggerの言うように、人間は、世界内存在として、世界の中に投げ出されながら投げ出す存在であり、そこにこそ存在理解が成り立ち、解釈が成立します。自己の可能性に向けて自己自身を投げ出すという行為が、歴史に対する問いかけを呼び起こし、それが歴史理解となります。わたしたちは、前に向かって生き、後ろに向かって理解するのです。わたしたちは、行為することによって理解し、理解することによって行為します。行為は理解をもたらし、理解は行為を導きます。

認識は行為であり、行為は認識です。行為と認識は不可分です。わたしたちは行為しながら認識し、認識しながら行為します。わたしたちは、歴史の中で、身体を通して行為している生きた主体です。そういう行為する主体によって、歴史は認識されます。歴史の中で行為する者のみが歴史を認識し

ます。わたしたちは、舞台の上に身を投じている役者のように、歴史の中に身をもって飛び込み、歴史を認識しているのです。歴史における理論と実践は分かちがたく結びついています。

歴史の中での行為

わたしたちは、日々、歴史のただ中を生きています。わたしたちは、歴史の中で行為しながら、歴史を形成しています。誰も歴史の外に止まることはできません。行為は、歴史の外で行なわれるのではなく、歴史の内で行なわれているのです。わたしたちは、歴史の中において歴史を動かす歴史内行為者なのです。

歴史を動かすものが歴史の中にいるのです。しかも、そのような行為者を、歴史自身が生み出し続けます。演劇がそこで演じられる演技によって変えられていくように、歴史も、歴史の中の演技者によってどのようにでも変わっていきま

す。わたしたちは歴史内観測者であるばかりでなく、何より歴史内行為者です。歴史内行為は歴史を動かします。歴史的

行為が歴史の外で行なわれるのではなく、歴史の中で行なわれているからこそ、歴史に不確定性原理が成り立つのです。

だから、歴史における実験は一つの歴史内行為となり、歴史を攪乱します。したがって、実験によって歴史法則を実証することも、法則に基づいて歴史を計画することもできません。実験や計画は、歴史から必ずしっぺ返しを受けます。歴史における実験は、それ自身歴史の自己形成の一部なのです。二十世紀の共産主義の実験も似ても似つかないものを生み出しました。歴史は人間がつくるものなのですが、人間の手で計画することができないのです。歴史的实验は歴史内行為ですから、それまでの歴史的条件や履歴に影響されるばかりでなく、実験をしたことそのことが歴史的经验と履歴になってしまい、取り返しがつきません。歴史は不可逆であり、しかも法則を破る自由をもちますから、歴史においては、実験を繰り返しても、同じことが再現されることはありません。歴史においては、歴史をつくるものとつくられるものが一つなのですから、どの行為が投げ込まれるかによって、歴史の形成の方向はどのような方向にでも進みます。

なるほど、わたしたちは、歴史の中に好むと好まざるにかかわらず産み落とされています。そのかぎり、わたしたちは歴史によって規定されていますが、しかし、歴史を規定するのもわたしたちです。歴史によって行為が限定されるばかりでなく、行為によっても歴史が限定されます。歴史と行為の相互限定によって、歴史的世界は変動していきます。歴史の変動は、歴史内行為と歴史の相互限定から生じるのです。このように、形成されるものの中に形成するものがある歴史の自己形成の動きを、歴史の外から決定論的に記述することはできません。

例えば、生まれてきた子供にとって、言語は与えられたものであり、そのルールに従って言語を使用していかなければならないものですが、しかし、その子供も、成長するに従って、その言語の使い方を少しずつ変えていきます。そのために、言語は、世代とともに、その使用法や表現、意味や文法さえも変わっていきます。ヴィトゲンシュタインが言うように、言語の意味は、言語内におけるその使用によって決まります。言語ゲームの中で行なわれている行為によって、言語ゲーム

そのものが変えられていきます。ちょうど国際政治のルールのように、そのもとで演じられる行動や主張そのものによって、ルールそのものが変えられていくのです。

歴史も、また、その中で演じられる歴史内行為者の行為によって内部から変更されていきます。歴史はその内部に行為者を含みますから、その行為者によって、その規則そのものが変えられていきます。だから、このような歴史を、歴史の外から決定論的法則によって縛ることはできません。たとえ法則で縛っても、歴史は気軽にその法則を破って変動していきます。

としますと、制度化された価値を相対化し、既存の規範を敢えて破ってでもなされる歴史内行為が、逆に、大きな歴史的変動をもたらすことに注目しなければならないでしょう。既存の社会構造に規定された行為ではなく、既存の社会構造を規定し返す主体的行為が社会の変革を起こします。そのような行為によって、歴史の価値や意味も変換されていきます。客観的な動かし得ない歴史の流れがあって、その流れに沿って、個々人の行為が位置づけられるわけではありません。わた

したちが行為することによって歴史は形作られ、行為の中から歴史が織り出されていくのです。

その意味では、渦中の行為によってこそ、歴史は開かれると言わねばなりません。歴史は単に観察されるものではなく、行為されるものです。渦中に身を投じ、意を決して新たな未来に突入していく行為こそ、偉大な行為です。

例えば、北条時宗が度重なる元からの服属要求を拒み、意を決して元からの使者の首を斬ったとき、その後二度にもわたって神風が吹き、元軍を退散させることができるというようなことはもちろん分かってはいません。それでも、時宗は決断し、どうなるか分からない未知の世界にみずからの行為を投げ込んだのです。渦中の行為の中には、原因も結果も、分別も反省もありません。渦中の行為を動かすものは衝動や情熱であって、それは合理的理性を越えています。ひたむきに専心没頭し、止むに止まれず行なわれる行為こそ、歴史を動かします。没入する行為の中にこそ、真の自己があります。

それと比べるなら、歴史学が記述する行為の外面的記述、紀元何年と言われるような均一な歴史的時間の上に位置づ

けられた客観的な行為は、同じ行為でも、精気のない実感のわからない行為に見えます。渦中の行為は、後からの反省ではつかむことができないのです。渦中の行為を外から客観的につかもうとすれば、それ自身が別なものになってしまいます。右往左往しながらも現場を動き切り開いてきた政治家、現実には翻弄されながらも命をかけて決然と立った革命家の行為、これら渦中に身を投じて歴史を動かしてきた行為の真実は、歴史学によって客観的に描くことはできません。

渦中の行為は観察される行為ではなく、身体を通して実践される行為です。身体なくして行為することはできません。人は身体を通した行為の中で体験し、その体験の中にこそ新しいものが生まれます。実践の意味もそこにあります。わたしたちは渦中を生き、渦中で死んでいくのです。

2 自由と創造

英雄と天才

歴史を切り開く行為として、英雄の行為は見逃すことができません。英雄は、その勇気ある行為によって、新しい時代

を開拓していきます。英雄は、困難に面しても、その力強い行動力によって、大胆に事業を遂行していきます。英雄は、運命に立ち向かう者であり、戦闘者です。英雄は、不屈の精神をもって苦難に耐え、運命を打開していきます。英雄を動かすものは、強力な意志によって支えられた情熱です。英雄は、時代と戦いながら、自己の信念を貫いて行動し、時代を変革していきます。だから、英雄は、多くの場合、一つの秩序からもう一つの新しい秩序に移行する変動期に登場します。アレクサンドロス、シーザー、チンギス＝カン、ナポレオンなど世界史上の英雄、わが国の織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、坂本龍馬、高杉晋作、西郷隆盛など、みな、そういう変動期に登場しています。というより、むしろ、このような英雄たちによってこそ、歴史の変動期が形づくられていくと言ふべきでしょう。

しかも、英雄は、歴史の流れの中で神話化されていきます。歴史上の英雄像には、民衆が描いてきた理想像や偉大な者への尊崇の感情など、民衆の願望が託されていきます。わが国でも、倭建や源義経などに代表されるように、英雄像も歴史

とともに創造されてきました。それは、事実のみを追究する実証史学を越えた歴史の否定できない動きです。こうして、英雄像は時間を超越した歴史的典型となり、人々の行動の指針や理想像となっていくます。

もつとも、時代は、英雄と似て非なるものを英雄に祭り上げることがあります。特に現代は、民主主義社会、全体主義社会を問わず、英雄ならざる偶像を生み出します。現代は偽英雄の時代です。偽英雄は単なる煽動家あるいは野心家にすぎないのですが、現代の大衆は、これを、大衆の願望を一身に体現した英雄として、大衆の偶像に祭り上げます。偽英雄は単なる幻想を売る山師にすぎないのですが、大衆はいとも簡単にその言動に誘惑され、これについていきます。二十世紀が生み出したヒトラーやスターリン、毛沢東などは、そのような偽英雄の典型でしょう。もつとも、このような偽英雄は、歴史による清掃作業によって、いずれは没落します。

宗教や芸術、科学や技術などの分野に現われる天才や偉人も、その行動や思想、作品や理論、発明や発見などによって、歴史に大きな影響を与えます。天才は強い確信と信念の持ち

主であり、独創的な能力と構想力をもち、それを実現する豊かですぐれた才能をもっています。そして、天才は、その独創性によって新しいものを創造し、その時代の典型や様式をつくり、時代に表現を与えます。仏陀やイエス・キリストなどの宗教的天才、ガリレオやニュートン、アインシュタインなどの科学上の天才などは、みな、そういう性格を備えています。天才は、文化の飛躍の推進者であり、新しい価値の創造者です。

また、偉人は、多くの人々がどのような方向に進むべきか迷っているとき、時代がそのときどきの風潮に動かされて流されていくときに、正しい方向を指し示し、時代を開拓していきます。偉人は、その時代に認められないことも多いのですが、それにもかかわらず、時代の軋轢に屈することなく、自己の信念を守り、新しい歴史を形成していきます。わが国でも、江戸幕府末期の大塩平八郎や吉田松陰などは、そのような偉人の代表と言えます。

天才や偉人は、時代がつくるとともに、時代をつくります。彼らは時代の革新者です。彼らの苦闘を通して、新しい歴史

は形成されます。歴史を単に偉大な人物の物語とだけすることはできませんが、しかし、偉大な人々を見出さない時代は歴史の不幸です。偉大な人々は、新しい時代を創造する歴史的生命的核なのです。偉人は、時代の風潮に迎合しているだけの単なるタレントではありません。だからこそ、彼らはその後の時代の模範ともなり、教師ともなるのです。

偉大な英雄や天才や偉人を、歴史の創造を担う創造的個人として高く評価しなければなりません。創造的個人は、歴史の道筋に決定的な影響を与える傑出した個人です。これら創造的活動をする卓越した個人は、いつも苦難を乗り越え、時代を動かしていきます。そのような創造的個人の創造的行為によって、歴史は創造されていくのです。歴史的個人は、そこへと歴史の力が集まり、そこから新しい力が湧き出てくる歴史の焦点です。そのような歴史的個人の創造的行為がなければ、歴史は変革されません。

ヘーゲルは、このような世界歴史を更新するような歴史的人物を〈世界史的個人〉と言いました。確かに、時代の大きな変革を起こすのは、そのような世界史的個人の創造的行為

です。政治の革命であれ、科学の革命であれ、巨大な革命は、最初はたった一人の独創的個人の考えや行動から始まりま
す。そういう少数の個人の活動から、新しい歴史は始まるの
です。

なるほど、歴史を動かすのは民衆であり社会構造であるとい
う考えがあります。しかし、その民衆を率いてある一定の
方向に動かしていくのは創造的個人です。創造的個人によっ
て、社会構造も改変されていきます。時代の場に抛たれた創
造的個人の創造的行為がゆらぎを生み出し、それが時代の場
に生かされ、時代は新しく編成し直されていきます。

発明と発見

行為によって歴史が開かれるとすれば、偉大な発明や発見
が社会を一変させることにも注目しておかねばなりません。
発明・発見史上偉大な業績を残した天才や技術改良に尽くし
た名もなき技術者が、歴史変動に果たした役割は大きいと言
わねばなりません。長い人類史を振り返ってみても、新しい
道具の発明や製作が社会を大きく変えてきました。

例えば、紀元前二〇〇〇年以後のユーラシアの人類史を概観しても、ここでは、ユーラシアの草原地帯を根拠に活躍した騎馬遊牧民の技術が歴史変動に果たした大きな役割を評価しなければなりません。特に、ユーラシアの騎馬遊牧民は鉄の精錬技術を発達させ、騎馬技術と戦闘技術を改良し、ユーラシアの西や南や東の諸文明を攪乱して、世界史を大きく変えてきました。中国の春秋時代から戦国時代への突入やその後の秦漢帝国による中国文明の成立も、遊牧民がもたらした鉄精錬技術の流入と武器の発達なくしてはありえませんでした。わが国が、弥生時代から古墳時代、飛鳥時代にかけて、地域国家の形成から統一国家の形成に向かったのも、その背景には、朝鮮半島からの鉄生産技術の流入がありました。

航海術の発達や船の改良による歴史変動も大きいと言わねばなりません。ヨーロッパ人が大西洋を横断したのはコロンブスに始まるわけではなく、それ以前に、ヴァイキングなど、かなりのヨーロッパ人が新大陸に渡っていたことが知られています。しかし、それでも、コロンブスの新大陸発見は、ヨーロッパの歴史を考える場合、大きい意味をもっています。

この発見によって、その後、アメリカ大陸、アフリカ、ヨーロッパを結ぶ大西洋交易圏が成立、新大陸がヨーロッパ近世の構造に組み込まれるとともに、ヨーロッパ自身が新大陸なくしては成り立たなくなります。メキシコ産やペルー産の銀の大量流入により、貿易構造も、新大陸発見以来激変しました。新大陸なくして、ヨーロッパの近世はありえなかったのです。

現代も、また、情報技術をはじめ科学技術の驚異的な発達によって、国民国家の枠組みが根底からゆらぎ、人類史は、より大きな広範国家形成へ、さらに世界統合に向かって激変している時代です。技術の発達は、社会や国家を大きく再編し、歴史を塗り替えていきます。しかし、この技術の発達もひとりでの起きるのではなく、そこには、有名無名を問わず、技術の開発に携わった人々がいたのです。どのような技術にしても、その元をただせば、誰か一人の心に湧き出た工夫や洞察から始まります。その行為が出発点になって、歴史は大きく変えられていくのです。

環境の意味を新しい角度からとらえ直してみる能力が洞

察力です。人類は、この洞察力によって環境の新しい意味を創造してきました。道具の発明や技術の開発は、環境の意味変換によってなされます。人類の歴史は、石器の発明以来、農業や牧畜の発見を経て、今日の高度情報技術開発に至るまで、環境の意味変換の歴史でした。そして、それは、環境への人間の適応を可能にしてきました。人間は、道具の発明や技術の開発、社会の構造や制度の変革などによって、環境に適応していきます。しかも、同じような自然条件下にあっても、人間の反応は機械的ではなく、多様な反応と適応のしかたを示します。

だから、地理決定論は誤りです。例えば、砂漠地帯に住む古代の諸民族のほとんどが多神教だったことを考えれば、砂漠地帯だから一神教が生まれたのではないことが分かります。砂漠地帯に住むそれぞれの民族の反応と適応の違いを考えねばならないのです。

また、同じようなことですが、わが国が島国だったとしても、島国だから閉鎖的になるとは限りません。島国だということは単にわたしたちの歴史的活動の条件にすぎず、それを

どう利用するかによって、わたしたちの生活の性質は変わります。実際、海を障害と考えず交通路と考えれば、島国はむしろ開放的になります。航海術という技術は、それを可能にします。

人間は、道具の発明や技術の開発によって、環境の制約を乗り越えることができます。人間は、そのような行為によって環境に働きかけ、自己と環境の関係を乗り越え、問題を解決していきます。行為によって世界は開かれます。行為によって変革が起き、ものごとの意味が変えられるのです。そして、そこから、人間の歴史は大きく変わります。

人間は、技術によって環境に適応してだけでなく、環境を改変し、積極的に環境を創造してきました。物の製作という行為は、環境の改変をもたらします。人間は、食糧獲得や運輸・通信などのために自然を開拓し、自然の猛威を克服してきました。旧・新石器時代以来、技術がなければ、今日のわたしたちの文明の大部分はなかったでしょう。そして、それは、改変された環境をさらに改変していくということによって形成されてきました。

現代の日本文明といっても、もはやモンスーンというような自然風土の条件だけでは規定しきれない巨大な高度産業技術文明を形成しています。とともに、環境もまた、高度産業技術によって大幅に制御された文明的環境に改変されています。それは、もはや稲作漁撈文明などとも規定することのできないものです。それにともなって、国民性とか文化という目に見えない文明の核も変化していきます。

人間が環境を変えていくということがなければ、歴史というものはなかったでしょう。人間は技術を通して環境を改変するとともに、自らの社会組織を変えながら、歴史を形成してきたのです。そのため、今日においては、わたしたちのまわりの自然環境そのものも、もはや単なる自然の産物ではなく、長い人間の歴史の営みによって形作られてきた歴史的環境となっています。人間は、環境の内にながら環境をつくり、環境を創造してきたのです。そこに、技術と歴史の意味があります。

なるほど、人間は自然法則の束縛を受けています。しかし、人間は、同時に、その自然法則に従いながらも、技術によっ

て、自然の制約から自己自身を解放してきました。環境に対する人間の技術的適応によって、環境の新しい形を創造してきたのです。そこに、人間の文明の営みがありました。物の製作は自由を含みます。技術は、ある意味で、自由な創造なのです。

確かに、現代文明の技術力は物凄く、その環境改変能力の飛躍的増大は自然環境への負荷を増大させているばかりか、戦争の増大、人間の機械化、身体性の欠如など、自然根源性の喪失をもたらし、その破壊力は凄まじいと言わねばなりません。

しかし、それでもなお、人間の歴史は環境に規定されると同時に、環境を規定してきました。わたしたちは、環境によってつくられると同時に、環境をつくってきました。衣食住、生業、戦争の形態など、歴史的営みが、地形や地勢、気候や風土に規定されると同時に、道路、所有地の境界、田園や都市など様々な地形や景観が、また、歴史的に形成されてきました。歴史は地理によって規定されると同時に、地理も歴史によって規定されます。人間と環境の相互作用から、歴史は

形成されていくのです。

技術上の発明や発見も、人間と自然の相互作用の中から出てきます。発明・発見は、洞察力によって新しい選択を見出し、新しい形を創造していく一種の創作です。それは、自然を加工し、すでにある組み合わせから新しい組み合わせを見出し、以前にはなかった新たな統合を生み出します。この発明・発見は、しばしば人間の生存を根本的に転換し、文明の突然の飛躍をもたらしてきました。石器の製作でさえ、人類史の当初にあっては大発明だったのです。それを境にして、人間生活も一変したのです。この地球表面の景観を一変させるほどの威力をもつに至った技術的創造力の根源は、単なる人間世界を越えて、どこか超人間的な生命力に駆動されているかのようです。

技術的行為も大きく歴史を創造してきました。技術の進歩によって歴史の発展が急激に起きるということは無視できません。技術の発展が生産力を増大させ、社会・経済の変化を起こし、それが歴史を動かしていきます。現代の産業技術文明の源泉である産業革命も、機械生産と化石エネルギーの

利用という飛躍的な技術開発によって起きたことです。とすれば、そこで働いている偉大な技術者の創造的活動を歴史の大きな駆動力として評価しなければなりません。

歴史の中の自由

高杉晋作の意を決した行動がわが国の新たな歴史の形成を加速したように、あるいは、蒸気機関の発明が現代の巨大な産業技術文明の出発点になったように、行為こそ歴史を開きます。そして、そこに自由があります。自由に基づく決断から、歴史はつくられていくのです。人間は歴史を変革し、新しい歴史を未来につくっていきます。なるほど、わたしたちは過去の歴史的条件に制約されてはいますが、しかし、わたしたちは、現在における行為によってそれを克服し、歴史を新しく形成していくことができます。そこに、行為の自由があります。

わたしたちは、必ずしも、歴史的必然や運命に支配されてはいません。わたしたちは、必ずしも、社会の制約や階級的な条件に束縛されてはいません。人は環境に規定されながら

も、環境の制約を乗り越え、環境を新しくつくっていきます。

歴史は、また、歴史の因果法則にも決定論的法則にも支配されてはいません。人間は、行為によって、歴史法則を破る自由をもっています。法則を破る自由な行為が、歴史を新しく形成していくのです。歴史がすでにつくられていることに注目すれば、そこに必然と運命があると言わねばなりません。が、歴史をつくっていくことができることに注目すれば、そこに自由の地平が開かれてきます。わたしたちは、必然と自由との戦いを通して、未来を開拓していくのです。

歴史にはいくつもの分岐点があり、そこにはいくつもの選択肢があります。その分岐点において、どの方向を選択し、どのような行為を投じるかによって、歴史の新しい自己形成は始まります。それは、予見不可能で不確実な動きであり、非決定的で偶然に満ちています。しかし、そこに自由があります。未来の歴史は、ある意味で、現在における決断一つでどのようにでも形成していくことができるのです。そこには予測不可能性がありますが、予測することができない創造性にこそ、自由は宿っています。現在の瞬間は創造的であり、

創造の瞬間にこそ自由があります。

行為と創造

出来事と出来事の相互連関から、歴史は変動していきます。一つの出来事の生起には無限の出来事が働き出、その一つの出来事からまた無限の出来事が生成してきます。そして、その出来事は、行為から生起してくるのです。

歴史は、無数の個人の行為が相互に作用し合って、次々と新しいものを創発していく自己組織系です。相互連関性の場に投げ出された行為がゆらぎを生み出し、そのゆらぎが増幅されて、歴史は不断に新しい秩序を生み出していきます。だから、どんなにささやかな行為でも、相互連関性の場を通過して他に影響を及ぼし、歴史を動かします。まして、偉大な発明や発見、偉大な革命行為などは、歴史に大きな影響を及ぼします。歴史の自己形成は、相互連関性の世界で個々人が行為することによって起きるのです。行為する主体は、世界の相互連関性を変えます。わたしたちの行為は相互連関性によって形成されていると同時に、その相互連関性を組み替えて

もいるのです。

独創的個人が新しいものを創造し、それが相乗的に社会を動かしていくことに注目しなければなりません。長い歴史の中では、少数の独創性のある先駆者が大勢の人々を巻き込んで、歴史を創造してきました。もちろん、名もなき者や敗者も歴史の形成に貢献しますが、どちらにしても、歴史的個人は、みずからの行為を通して、歴史を創造する活力をもっています。

この点から言えば、歴史の動きに一般法則を見出そうとするのではなく、その法則によっては律しきれない個性と創造性の方こそ見るべきでしょう。個性と創造性は、平均や一般化によっては処理しえませんが、もともと、歴史には何ら法則性はありません。人類の長い歴史においては、歴史的個人の勇気ある行動や偶然の発明・発見など、独創的行為が歴史を思わぬ方向に動かし、予測不可能な大きな変動を起こしてきたのです。

歴史は、絶えず新しい創造に向かって生成発展していきま

す。不断の創造、それが歴史です。だからこそ、状況に変化

を起こし、事態を切り開き、まったく新たなものをつくり出す創造的行為を評価しなければならないのです。

歴史的創造は突発的な行為から出発します。突発的な行為は歴史の連続性を破ります。発明や発見が歴史を思わぬ方向に飛躍させていくのも、そのことによります。地球上を覆うばかりの現代の産業技術文明の源泉も、蒸気機関の発明よりさらに古く、十八世紀末のイギリスで、綿の紡績を水力機械でできないかと考えた技術者の発想の瞬間にまで遡ることができます。発明や発見や決断など、創造の時間は一回的な時間であり、瞬間です。その瞬間のところに、歴史の分岐点形成されます。過去を集めて未来へ突入する現在の瞬間に、歴史をつくる行為があります。歴史をつくる行為は歴史的時間を限定し、新しい歴史的時間を創造していきます。そういう創造的行為によって、一時代を区切るエポックが形成されます。エポックとしての歴史的時間は非連続であり、そこに歴史の飛躍もあります。

はじめに行為があります。行為なくして歴史は形成されません。わたしたちがどのように行為し、どのように動くかと

いうことによって、歴史は新たに形成されていきます。行為は、歴史を動かす主軸です。歴史の中に行為があると同時に、行為の中に歴史があります。

人間の営む歴史は創造的進化の過程であり、絶えず変化し生成してやまない生命の運動です。この生成の中に行為があると同時に、行為の中に生成があります。行為がなければ生成もありません。為すことは成ることであり、為すことなくして成ることはありえないのです。

註

- 1 Marc Bloch, Apologie pour l'histoire ou Métier d'historien, Armand Colin, 1993,
- 2 Nietzsche, Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben, Unzeitgemäße Betrachtungen, Zweites Stück, Kröner, 1964,
- 3 Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer, 1963, §75 §76
- 4 Wittgenstein, Philosophische Untersuchungen, I・1

I・43, Suhrkamp,1967, S.13f. S.35

- 5 Hegel,Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte, Ph.B., Felix Meiner,1920, S.74f.

(出典 『小林道憲〈生命の哲学〉コレクション』3 ミネルヴァ書房 2016 京都 所収『歴史哲学への招待』第六章)